



川西町フレンドリープラザ



米沢名物「雪灯籠」の季節

# 「東北」の記憶。 あんなこと、こんなこと、 あったでSHOW...

開演直前、いきなり「あのヒト」(同会会長の菅原大吉氏)がスクリーンに…「映画」を彷彿とさせる演出だ。菅原氏はこの秋にこの場所で開催の竹内都子さんと二人芝居を行なう予定だ



## 新しい「映画」が始まった…

俺たちロックだけけど…と、ためらいがちな彼ら「トラッシュチルドレン」をいの一番に持ってきたのは、実行委員会にたまたま遊びに来た山口お氏のアイデアだった。「まるで『映画』みたいじゃないですか！」

そう、「映画」で希望に胸を膨らませてビデオ審査に臨んだグループたちのように、自分たちのロックを聴かせたくてたまらない彼らは、ドキドキしながら実行委員会に連絡し



トークショーの途中でなんと観客に「ガールズ」で小林陽子役を演じた原巴都子さんが登場！菅原さんに続いて、ビデオレーダーでみんなに熱いメッセージを！

た。快諾され、逆に戸惑ったかもしれないが、当日は幕開けにふさわしく、オリジナルを2曲、熱唱した。

おっと、まちがひ。本当の口開けは、午前中からのオープニングイベントだった。地元アフリカンパーカッショングループがロビーをあたためてくれたあと、「映画」撮影時に演奏の指導をした山口お氏が登場。氏は、東京音楽大学卒業後、主にクラシックを足場にさまざまな現場で活躍するトランペッターだ。ソロを聴いてもらうにはちょうどいい機会、と、本誌前号で氏とコラボしていただいた「BSC (プラス・サウンド・クリエイション)」に相談したところ、なんとBSC側から、彼らの楽器(フルラインアップ!)を現地に貸し出し、れおさんに吹いてもらうだけでなく、来場者にどンドン試奏してもらおう、という、実に豪華な企画が実現。結果、なんと数十万円もする輸入品をその場で吹いたり、おりしもアメ

「Sola」の演奏中、メンバーがなぜか騒ぎ始めた…見れば、なんと映写室から真島さんが手を振っている！キヤットと歓声…しかし「映画」では手、振ってなかったですけど…



オープニングセレモニーとして登場した地元アフリカンパーカッショングループのホットな演奏がロビーを盛り上げた

リカ大統領になったばかりのバラク・オバマ氏の就任パーティで、あのウィントン・マルサリスがオバマ氏とBSCを手に写っている写真が紹介されたり…と、これは実に思いがけない展開になったのである。この地でこの名器が披露されるのは初めてのことだったが、大いに来場者の耳目をひいたようだ。また、音楽祭の看板にもその名が出ている下倉楽器から「マルカート」も貸与された。希望者を募り、れおさんが直々の手ほどきでトランペットをその場で吹けるようにしてしまおう、という企画も行なわれたのだ。できなくてもともと、ということをやってみたのだが、なんと3人が3人も音を出すことに成功！ さすがガールズの指導者だ、と、大いに面目を施したのである。恒例となったガールズ弁当や、昨年よりさらにパワーアップした感のある地元名産の展示即売、また、県立置賜農業高校名物特選和菓子「三つ福」の販売など、本番前にすでにロビーは大賑わい。雰囲気は最高に盛り上がった。

そして本番。客席が暗くなると、ステージが暗くなると、そこに「あの顔」が浮かび上がった。それは「映画」の「第20回東北学生音楽祭」で司会者役をつとめた菅原大吉氏からのビデオレターだった。

そう、これらが新スタッフのアイデアだった。単に演奏を羅列するのではなく、演奏しないお客がいかにして演奏側と、いや「映画」の文化圏と一体感を持てるか。それが彼らのテーマだった。単に楽器を持ち寄って演奏して、合同演奏してはいオシマイ…という形にはしたくない、と、実行委員会は考えたのだ。

菅原氏は、なんと「映画」の台詞を再現。雪の中をついてガールズたちが駆けつけたあのシーンである。「え？なに？来たの…（気を取り直して）えー、それでは最後に、高校生としては珍しいロックバンドを…」そう、「映画」では「ジャズバンド」だったところを、置賜農業のロックバンド「トラッシュチルドレン」に置き換え、見事に音楽祭の開幕を告げたのだ。実行委員会の台本の勝利、である。

映画の再現は、まだまだ続いた。「映画」では女に振られまくる唄けな

ロビーではBSCとマルカートの展示&試奏会も開催。多くのヒトが、初めてのBSCの実物に驚き、そして感激、なぜ聞いたかという、見かけがほぼ全部同じなのに、音も値段も違うから、オバマ大統領のパーティでBSCの楽器が奏でられた、という話もウケていた

オープニングイベントでは「山口れおさんとトランペットで遊ぼう」を開催。ここでは「映画」にまつわる苦勞話を暴露。ガールズたちのマジメな練習話に一同感動。さらに会場から希望を募り、その場でトランペットが吹けるレッスンを「全員、見事に音が出た！（上と中）。また、山口れおさんによるソロ演奏（BSCとマルカートを使用）も堪能。BSCによるソロでは珍しいC管「アルマンド」による演奏も（下）



い兄弟の「兄」役だった真島秀和氏が山口れお氏と並んで特別ゲストとしてステージに登場。「映画」とは打って変わった？イケメンぶりで女性客を魅了しつつ、トークショーでは山口れおさんと映画の裏話を暴露していただいた（同会は、役不足ながら、たまたま映画のラストシーン取材に立ち会った縁で本誌編集長が勧めさせていただいた）。さらに「川中陽子」役を演じ、トロンボーンを熱演した阪田奈都子さん（彼女は熱血吹奏楽少女だったのだ）からのビデオレター、置賜農業高校演劇部のサンバ乱入、そして熱演に次ぐ熱演の果てのフィナーレでは、楽器を持ったものも持たないものも、全員で「ブラジル」（作曲：山下定英）を演奏…と、こ



写真は、本誌と川西町フレンドリープラザの提携で行なわれた「たった二カ月で、指導者なしでどれだけ楽器が吹けるようになるか」実際にこぼ力いただいたみなさん。自己流の練習は迷められない…とは言っても、おいそれと指導者がいない場合は汎山ある。彼らは本誌や、教則本を頼りにともかく音が安定して出せるころまで出来た。迷ったらとてあえず電話ください、と申し上げておいたら、やっぱり編集部に電話が。しかし残念ながら、電話ではこちらも要領を得ず、たいしたアドバイスができなかった。ほんとにすみません。しかしみなさんは本当に頑張った。本番当日、見事に「聖者の行進」を2コーラス演奏したのだ。当初はカラオケで…というつもりだったが、当日は現場の「楽器族」な皆さんが助っ人として入ってくださり、大熱演が可能に。2コーラス目でステージ前方に数歩ステップして吹き始めた時、私はひびが果立つような想いにたどられ、感動しました…と、助っ人ドラマーのTさんは後に語ってくれた。また、山口れおさんも大いに協力してくれた。「ボクこういうの大好きなんです。またぜひやりましょうね！」山口れお

うしてメモを列挙しただけでも、実に盛り沢山。さしもの豪雪も、若干早めに溶け出したようだ。そうだ、この「祭」は春を呼ぶんだ。

### 新たな映画が始まっている…

結局これだけ盛り上がった一番の理由は、やはり現地の「気持ち」に尽きる。もっと正確に言えば、頼りない（風を装う？）実行委員会だったればこそ、逆に参加者の方が積極的に「こんなやり方いい」「あんなのはどう？」という声を出したくなる、自然に声を上げたくなる、そんな雰囲気醸成されたのである。悩み、奮闘するその姿が、参加者を一丸と

させたのだ。というわけで5年目にして地元ですでに「映画」を越えた。新しい「映画」が、川西楽器族のあいだですでにたくさん、芽吹き始めているのである。